

今、社会問題になつていて、子どもたちによる携帯電話等のメールのやりとりで、相手の顔を知つて会話しているのは、5人に1人という実態があると聞いたことがあります。文字のやりとりだけで互いの気持ちが十分に通じ合えるのでしょうか。

インターネットの掲示板への書き込みがきっかけで、小學生が同級生の大切な命を奪つてしまつという事件が数年前に佐世保市で起きたことは記憶に新しいところです。子どもたちを巻き込んだこのやりとりだけでは、相手の感情や表情が見えず、互いの本当の気持ちは十分に通じないのではないか。メールだけではなく、毎日の子どもたちの会話の中にも、相手を傷つける「ことば」があり、そのことが現在のいじめや差別につながっているように思えます。

筆者がある日読んだ新聞のコラムの中に次のような「ことば」がありました。

## 善き言葉・あしらひの言葉

『私たちが人に投げた一本の矢は一本となり私たちの体に刺さつてゆく。

私たちが怒ると一本は相手に飛び、一本は自分の心に刺さつてゆく。怒った相手に飛んだ矢は二倍になつて返される。私たちが口にする言葉や、怒る感情はまず自分の耳と心に入る。・・・善き言葉もあしき言葉も。

自分の耳が一番自分の口に近い。どんな言葉も、まず自分の耳に届き次に相手に飛んでゆく。人を叱つたつもりが、自分自身がいつまでもイライラしてしまつことがある。怒り続けると自分が壊れる。相手を責め続けると自分の心もズタズタになる。

善き言葉もあしき言葉も最初に効くのは自分自身である。すべて私たちの体と心の両方に影響してゆく。

自分の口から出る言葉は、相手よりもまず自分の心に深く突き刺さり、自分自身を傷つけていくことを知つてこう。』

要約するといいのようないい内容でした。

認める・ほめる・はげます

自分の口から出た言葉は、確かに自分も聞いてはいるが、これまで、特に気にしたことはありませんでした。しかし、考えてみると、怒つたときに「ことば」は、自分自身をもいやな気持ちにさせ、ほめたときの「ことば」は、自分自身も楽しくなつて、ことに改めて気付きました。

このように考えますと、毎日の生活の中で、子どもの行動を「認める・ほめる・はげます」ことが、子どもたちの自尊感情を高め、豊かな心を育てることになることに気づきます。

自尊感情をもつた豊かな心からは、人を傷つける「ことば」や相手の心に突き刺さるような「ことば」は出ないはずですし、相手のことを大切にする態度や行動力が芽生えてくるはずです。

これらの資料から(1)弘長一年(一一六一・坊主墓の五輪塔)。(2)文永五年(一一六八・虎が塔、県内最大の五輪塔)を最古に最後は(3)永禄七年(一五六四・坊主墓の板碑)。

益城町のすべての子どもが「自分の大切さと共に他の人を大切にする」人間関係を築くことができる豊かな心を持つた大人へと成長してくれます。

## 歴史の変遷と地名

### 地名漫歩

299



内寺地区の背後にある福田寺跡

朝来山の中腹に「福田寺跡」があります。古文献も無く資料としては、第一次世界大戦後的好景気の時と昭和四十年代列島改造の時の造園ブームのため寺域外に持ち出された跡に、わずかに取り残された板碑と五輪塔残欠、伝承だけの幻の寺です。

そのわずかの資料から当時の社会情勢の中で本町の中世史に大きな関わりを持つ福田寺を歴史の方面から考えてみます。

基礎資料には「熊本県史跡調査報告書」益城町文化財報告書第八集「益城町の中世山岳寺院」永田日出男著「福田寺跡覚書」「益城町史」があります。

これまでの調査結果によれば、

ですが、当時益城町では(1)飯田山常楽寺、(2)津森宮の西福寺と東西の宗教圏があり、それに挟まれて(3)赤井・木崎・木山・寺迫・安永・福原地域の宗教空白地帯があつた。この頃貴族仏經ではなく衆生サクイド・グンザリエイチヨウの頃貴族仏經ではなく衆生濟度・現世利益を旨とする鎌倉新仏經が勃興した。(5)山岳寺院の言葉通り開基は名峰である事などの条件が揃つた。また肥後で鎌倉幕府の勢力を伸ばしたい北条氏が、後発寺院福田寺の勢力伸長を謀りそれを拠点としたい政略が背後にあり、大衆の渴望を背景に新仏經の一つとして修驗の聖地、朝来山に福田寺が開基されたのでしよう。

では福田寺と朝来山の関係

が、強く願つてい

ます。